山口逸彩人

やまぐち［いさいびと］
yamaguchi isaibito

きらり輝く山口の

［山口逸彩人］　花火業者「鎌田煙火」代表 石丸 浩さん

「想いに報いる」が原動力

［column］　まりりんの美味しいもの日記
Lisa's Photo Gallery

vol.02
yamaguchi isaibito
2017. SUMMER

山口逸彩人

やまぐち［いさいびと］

「想いに報いる」が原動力

花火業者「鎌田煙火」代表●**石丸　浩**さん

山口県で唯一の打ち上げ花火業者「鎌田煙火」代表の石丸浩さん。鎌田煙火は明治時代の創業で、石丸さんはその四代目に当たります。一度はサラリーマンの道へと進みましたが、悩んだ末に家業を継ぎ、今ではここが自分の居場所だと言い切る石丸さんは、各地の花火大会で夜空に大輪の花を咲かせ続けています。

生きているうちは良いことを

――サラリーマンを辞めて家業を継ぐに至った経緯をお聞かせください。

石丸　小学生の頃から父の仕事をずっと手伝わされて、しかも丁稚のように下働きをさせられていたので、花火師は重労働できつい仕事だという認識しかなかったし、実際に打ち上げられた花火を見る余裕もありませんでした。だから自分の中で「仕事を継ぐ」という意識は全くなかったですね。

サラリーマン時代にも休みの日には手伝っていましたが、自分では「こんな所で何をやってんだ。ここは自分の居場所ではない」と思っていました。

そうは思いながらも胸の中に色々な葛藤が渦巻いてきて、実は悩んだんですよ。曾祖父の代から続いている鎌田煙火の名前をなくすわけにはいかない、と思ったのも葛藤の原因の一つだったし、色んな迷いが生じて二ヶ月間悩みに悩んで、遂に「花火やさんになる！」と決心しました。そして妻に「会社辞めるよ」と言ったのが32歳の時でしたね。

――その時、奥様は何と言われましたか。

石丸　「いいよ」と一言。

――反対はされなかったんですね。

石丸　散々悩んでいた僕の姿をそばで見ていましたからね。ほっとしたんだと思いますよ。

――葛藤を乗り越えて決断した理由は。

石丸　人間は生きているうちは人のためになる良いことをしなくてはいけない、若い頃は周囲に迷惑をかけたこともあった自分ができる良いことって何だろうと考えて、自分には花火しかない、ということに気がつきました。他にも理由はたくさんありますよ。でもこれが一番大きな理由ですかね。みんなに幸せになってもらいたい、ということは常に頭の中にあります。

自信と熱意の営業

石丸　継ぐと決めてまず実行したことは、花火を上げる現場を増やすための営業でした。国道9号線をひたすらまっすぐ東に走り、自治体や商工会議所などに行って営業をしました。気がついたら鳥取県まで行っていましたね。

――それで営業は順調にいったんですか。

石丸　いいえ、全く知らない所に飛び込みで行くわけですから、向こうとしてはどこの誰ともわからないヤツが来たのに、はいそうですか、ではお願いします、というわけにはいきませんよね。しかも花火って形がある商品ではないから、プレゼンには非常に苦労しました。一生懸命に考えて書いた資料を見せても、それだけではわかってもらえない。うちが上げる花火の写真を見せれば良いのでしょうが、花火の現場というのは広さや周りの環境、制約などがそれぞれ違うので、写真を見せてそれと同じものを打ち上げられるものではないし。

でも、うちの花火には絶対に自信がありましたから、それまで営業をしたことのなかった僕が、ない知恵を絞ってひたすら頑張りました。

――自信と熱意で頑張られたわけですね。

石丸　そうです。とにかくうちの花火を見て欲しい、気に入らなかったらお金はいりません、と言って（笑）。じゃあ試しにやってみろ、と言われていざ当日に花火を打ち上げたら、主催者の方に握手を求められて「素晴らしかった。感動しました」と言っていただけて。嬉しかったですね。もちろんお代はちゃんといただきました（笑）。

そうやって時間をかけて一つずつ現場を増やしていきました。あの頃は並行して福岡で修業しながらだったので、休みの日には営業に回り平日は福岡に戻って、という生活でした。きつかったですね。

辛い思い出

――福岡で修業、ですか。

石丸　親父の知り合いの同業者に預けられて、12年間そこで修業させてもらいました。厳しい会長でしたが優しい面もあって、営業に行く時や、鎌田煙火の現場に手伝いに行く時は、快く送り出してくれました。会長はアメとムチでしたがアメが一つだったらムチが10個くらい（笑）。

yamaguchi isaibito

——その福岡での修業を終えて鎌田煙火に帰ってきて、工場を建てられたんですね。

石丸　工場は元々は天神山の裏側にあったのですが、大雨で流れてしまったので平成18年に今の山口市徳地に建てました。要塞のような工場ですよ。毎日警察が見回りにきますし、何かあれば契約している警備会社と警察がすぐに来るようになっています。一般の人は入ることができません。

——お父様がその頃亡くなられたとか。

石丸　はい。僕はその時現場にいて手が離せないので、手伝いに来ていた弟をすぐに帰らせました。僕は親父の死に目にも会えず、葬式にも出席できなくて。

——それは辛かったですね。

石丸　辛い経験でしたが仕事だから仕方がないことだし、親父もそれはわかってくれていたと思います。亡くなる間際には僕の名前を呼んでいたそうです。

どうしたら喜んでいただけるか

——今の花火はコンピュータ制御で打ち上げるのだそうですね。

石丸　親父の代までは直接点火が主流でしたが、点火する際に花火が暴発する死傷事故が多かったので経済産業省からの通達で、全国的にコンピュータ制御に変わってきました。僕が継いだ時がちょうどその過渡期でした。慣れないコンピュータに四苦八苦しながら、しかもアメリカ製の高い機器を購入して、仕事が終わって毎晩勉強しました。今ではコンピュータ制御と直接点火と組み合わせて打ち上げています。その構成を考えるのに、また頭を悩ませます。

——構成とは何ですか。

石丸　花火のプログラムです。花火というものはただ上げれば良い、というものではありません。組み合わせで、花火の演出は全く違うものになりますからね。同じような組み合わせにしてしまうと変化のない平凡な演出になるし、多くの違う種類のものを配置や高低差にも考慮した構成にすると、メリハリがきいて感動的な花火になります。

頭の中で、どうしたら観客に喜んでいただけるかと、夜空に打ち上げたシーンを思い浮かべながら、構成を考えていきます。約一ヶ月前から考え始めますね。

原動力は想い

——花火大会前日の準備も見学させていただきましたが、炎天下での作業は本当に重労働だなと思いました。一ヶ月前から構成を考える頭脳労働と、体力勝負の重労働を続けていくのは大変でしょうが、その原動力はどこからきていますか。

石丸　「想いに報いる」ことですかね。どこの花火大会の現場でも、主催者さんたちは一年間かけて準備をしているわけですよ。一つのイベントを開催するというのはたくさんの苦労があり、一つ一つクリアしていかなければならない。そしてやっとその日を迎えることができる。だからその方たちの苦労や想いに報いたい、素晴らしいと思っていただける花火を上げたい、その一心です。イベント成功のために、少しでも手助けをしたいと思っています。

そして観客の方に喜んでいただけて、夢や希望や活力を与えることができたら最高ですね。そのためには、どの現場でも毎年違う趣向の花火を打ち上げることを心がけています。そういう自分の想いだけで続けています。

——石丸さんにとって花火の魅力は何ですか。

石丸　花火の準備には目に見えない多くの苦労があるのに、打ち上げる時は一瞬で美しく散ってしまう。その美しさ、儚さですかね。

こどもの日のプレゼント

——昨年から五月五日のこどもの日の夜には、山口県立防府総合医療センターに入院している子どもたちのために花火を打ち上げているそうですが。

石丸　僕は子どもが好きなんですよ。何年か前に鳥取県での現場が終わって片付けていると、近くの病院に入院している小学一年生くらいの女の子がお母さんと一緒に暗い中をやってきて「ありがとう。いい花火でした」と言ってくれました。その言葉に不覚にも涙が出ましたね。

そのことがあってから、病気の子どもたちを元気づけるためにできることをしたいと思い、まぁ、僕ができることといったら花火しかないわけで。そして準備を進めてやっと去年一回目の花火打ち上げをすることができました。これもまた、たった五分間の花火のために、消防署を初めとして、許認可申請がたくさん必要になります。現場となる医療センター近くの佐波川土手は高速道路の下だから、その許可も取らなくちゃいけないし。一人であちこち走り回って、やっと実現することができたんです。

——そして今年は二回目の開催をされたわけですが、全てボランティアだそうですね。

石丸　そうです。「ふるさと想い出花火大会」実行委員会の仲間たちも全て手弁当で手伝ってくれて。病気の子どもたちを元気づけたい、喜ばせたいという僕の想いに共感してくれる仲間たちの協力があるからこそできるんです。仲間には本当に感謝しています。屋上から見て喜ぶ子どもたちの姿を思い浮かべながら、これからもライフワークとして続けていきたいと思っています。

——今後の夢は。

石丸　息子が僕の跡を継いでくれるので、彼を一人前に育てることですね。

profile

石丸　浩さん

1961年（昭和36年）5月生。
やりがいのある仕事ができることが幸せ、という石丸さんは仕事に対する自信と誇りにあふれている。常に危険と隣り合わせの仕事だから、安全には充分注意するよう、スタッフにも口やかましく言っているそう。お陰で今まで無事故でこられた。信頼関係で結ばれたスタッフと、陰で支える奥様と、石丸さん同様サラリーマンを辞めて跡を継ぐ息子さんとの「チーム石丸」は、これからも華やかな花火大会の縁の下の力持ちとして、長く、夜空を彩ってくれるだろう。

［鎌田煙火］
山口市徳地串字里平2434-1
tel.0835-54-1036

yamaguchi isaibito

山口逸彩人

やまぐち［いさいびと］

人は誰でも「きらり」と光るものを持っています。
その「きらり」を発揮することによって
人は異彩を放ち、逸材となり、輝きを増していきます。

そのような意味を込めて
タイトルを「逸彩人」と名付けました。

山口の多くの「逸彩人」の
「きらり」を切り取って、
これからも皆様にお届けしていきます。

山口逸彩人　vol.02［2017.SUMMER］

2017年夏 発行［季刊発行］無料配布 ○発行元／博友舎［山口逸彩人］編集室　山口市大内御堀1044-8 tel.083-927-7922
○発行責任者／國安 博之 ○文／真里 瀛 ○写真／栗子谷 梨沙 ○デザイン／武田 祐治